

氏名	阿 部 茂 人
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 189 号
学位授与の日付	昭和41年 9 月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	脾の比較組織学的研究 第1編 茨組織の異物抑溜能に関する研究補遺 第2編 ニワトリおよびイシガメの脾における茨組織の生後発生 第3編 脾のいわゆる濾胞周辺部, 特に異物の貯溜と生後発生
論文審査委員	教授 尾曾越文亮 教授 大内 弘 教授 新見嘉兵衛

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

著者の研究は脾の主要構成要素のうち、とくに、茨組織と濾胞周辺部について比較組織学の立場から検討を加えたものである。論文は3編からなり、著者は第1編においては、ニワトリ、ネコおよびイシガメを用いて、血行内に注入した墨粒子が茨組織に選択的に高度に集積することを確認し、その集積の機序は茨組織を構成する細網細胞の強い食作用によるものであることを指摘するとともに、茨組織に集積した墨粒子のその後の運命を追求している。第2編においては、ニワトリとイシガメの脾における茨毛細血管と茨組織の生後発生について述べ、茨組織は生後早期に（ほぼ生後10乃至15日以内に）完成すること、およびその生後発生は周動脈リンパ組織鞘および赤髄のそれとほぼ平行することを認めている。第3編においては、脾のいわゆる濾胞周辺部の意義とその生後発生について述べている。ネコ、ウサギおよびラットの濾胞周辺部の墨粒子の貯溜は血流の停滞による単なる機械的なもので、上述の茨組織における抑溜機序とは全く異なることを指摘している。また、ラットの脾の濾胞周辺部は生後3週目に形成され、その出現は脾の二次小節の芽中心の出現にやや先行することを認めている。

昭和41年3月 山口医学第15巻第1号に掲載

論文審査の結果の要旨

阿部茂人提出の「脾の比較組織学的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

本論文は脾の莢組織と濾胞周辺部について比較組織学の立場からとくに異物抑溜能を中心として研究したものである。第1編では、莢組織の発達している動物で血行内に注入した墨粒子が莢組織に選択的に集積し、ついで周囲に分散し赤脾髄の細網細胞に蓄積する過程を追及し、異物粒子の抑溜は莢組織を構成する細網細胞の強い食作用によるものであることを明かにした。第2編ではニワトリとインガメの莢毛細血管と莢組織の生後発生について述べ、莢組織は生後早期に完成することを認めている。第3編ではネコ、ウサギおよびラットの濾胞周辺部に墨粒子が貯溜するのは、莢組織の場合とは異なって、血流の停滞による単なる機械的な機序によるもので、濾胞周辺部の細網細胞には食作用の見られないことを指摘している。また、ラットの濾胞周辺部は生後3週目に形成され、その出現は脾の二次小節の芽中心の出現にやや先行することを認めている。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。